

大学留学生に対する「わかる授業」の実践(1)

—— 講義「異文化を学ぶ」における日本語の面白さの導入指導 ——

栗原 昭徳

Easy Understanding Lesson Story “Nyāgo” to Foreign Students (1)

—— To Joyful Teaching Japanese Language in Lecture “Foreign Culture Study” ——

KUWAHARA Akinoi

(Received February 10, 2005)

キーワード：留学生・日本語・わかる授業

1. はじめに

1989年(平成元年)は、わが国における「第三の教育改革」の年であった。戦後の新教育として導入された1947年発足の学校教育法に大きな改革をもたらされたのであった。

1989年3月、従来の幼稚園教育要領は大幅に改訂されて、総則の冒頭には幼稚園教育の方法原則とも言うべき「環境を通しての教育」が前面に押し出され強調された。

同要領においては「体験を通して、生活を通して、遊びを通して、活動を通して、表現を通して」などの「通して」という用語が多用された。けれども、「環境を通して」という用語は、同要領の総則冒頭の1か所だけにしか使われていない。いわば多用されている様々な「通して」を代表する総まとめのキーワードが「環境を通して」なのである。「通して」の教育、つまり「間接教育」が幼稚園教育の方法原則として、幼稚園教育要領の冒頭に位置づけられたのであった。

また、この年、小学校学習指導要領においても、第9番目の教科として「生活科」が新設されたことは特筆されてよい。教科の新設は、1947年の学校教育法の公布以来、42年ぶりの出来事であった。新教科「生活科」の教科目標の冒頭には「具体的な活動や体験を通して」と明記されて、ここでも「通して」が教育方法上の原則であることが明示されたのであった。

じつは、「通して」という表現が初めて現れたのが1989年の指導要領の改訂時であったというわけではない。すでにそれ以前から、算数(数学)や理科、音楽、家庭科などの教科の目標や特別活動の目標などにおいては、主として「活動を通して」という形で用いられていたのであった。

間接指導「活動を通して」は、幼稚園や保育所における教育方法の原則であるにとどまらず、小学校や中学校における教育方法の原則でもある。それは子どもたち(被教育者)の自主的な学習活動を育成する原則という意味において、21世紀の教育方法でもある。

2004年度後期、私は教育学部内の講義「異文化を学ぶ」の2コマだけを担当することに

なった。私の担当したのは、正月休みを挟む2回の講義であった。2004年12月16日（木）2時限と、2005年1月14日（木）2時限の2回であった。

本論では、このたびの私自身の異文化授業の実践を通して、上記の「活動を通して」という教育方法が、大学において留学生に対する「わかる授業」を実現するときの方法原則として成り立つかどうかを考察する。

2. 授業の構想と指導内容

2004後期の、いわゆる「異文化講義」の正式な講義名は「異文化を学ぶ—日本の伝統文化と現代」であった。私は、その内の第10・11回を担当することになっていたのだが、最初に届けておいたテーマは「日本の小学校の教科書から(物語を読もう)、(1)(2)」であった。そのほかにも、いくつかの教材を準備しておいたが、これまでの経験から外国人留学生の日本語能力にばらつきがあることを予想して、どの段階の日本語能力であっても対応できる絵本教材にすることにした。

このたびの教材は、小学校2年の国語教科書に掲載されている絵本教材「ニャーゴ」を選定した。じつは、すでに2003年度後期の共通教育において開講した「絵本の教授学」で用いた教材でもあるので、この絵本教材に対する留学生反応や学習活動については予想もできたし、期待もしたのであった。

アシスタントとして、私の研究室で小学校低学年授業の指導方法についての卒業研究を進めている4年生にも出席してもらうことにした。

あらかじめ講義の前に準備をしたのは、下に示す講義要項（A4版1枚）と教材「ニャーゴ」のカラーコピーの二つであった。

受講者およびアシスタントに対して、下記の講義要項を手渡した。実物はA4版であるが、本論に収録するにあたっては、記入欄等を省略して、ほぼ½に圧縮してある。

2004年「異文化を学ぶ—日本の伝統文化と現代」第10回

■日本の小学校の教科書から

小学校2年教材「ニャーゴ」を読む

2004.12.16.木.10:20-11:50

栗原昭徳（幼児教育研究室）

アシスタント竹下真生・幼教4年

アシスタント森田尚子・国理4年

1. 簡単な自己紹介から

2. 日本のあいさつ言葉

どんな「あいさつ言葉」を知っていますか

あいさつ言葉の語源

3. 「ニャーゴ」を読んでみましょう

●ミニレポート●2004.12.16.異文化を学ぶ(栞原)

名前()

(記入欄等のスペースは省略)

アシスタントとして出席してくれたのは、栞原研究室で卒業論文を書いている4年生の竹下真生さん、森田尚子さんの二人であった。結果から考えると、小学校教師を志望している二人にとっても、国語の指導技術を考察するために役立つことになった。

本論は2回にわたって執筆する予定である。本論(1)は、この講義の導入部分の自己紹介や参加者の日本語名に関する話題を中心に、日本語の中の漢字の面白さを扱ったものである。第1回講義のメインとなる教材「ニャーゴ」第1ページの音読に関する指導については、本論に続く「大学留学生に対する「わかる授業」の実践(2)——講義「異文化を学ぶ」における絵本教材を用いた音読の指導——」にゆずる。

3. 授業の実際

異文化授業の第1回目の、大まかな経過は、次のとおりである。

2004年12月16日(木曜)2時限、

10時20分、講義開始時刻。栞原、入室、準備。

アシスタント学生二人も入室。

10時25分、講義始まり。出席者の確認。授業始まりの挨拶。

栞原の名前の紹介。アシスタントの紹介、馬新媛さんの名前の紹介。

教材「ニャーゴ」の配布。音読の仕方などの指導。約65分の講義。

11時30分、次回の予定を知らせる。ミニレポートの記入(20分)。

11時50分、提出。講義終了。

授業は、つぎのようにして始まった。

a ■授業者としての教室の準備

授業者は講義の開始時刻の10時20分には入室をすませた。

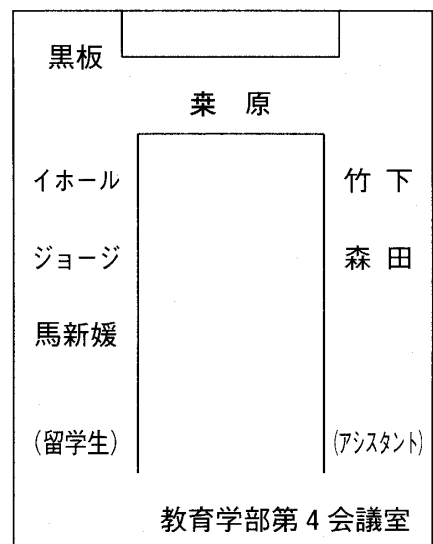
窓を開けて、ストーブに点火した。黒板がきれいに消してあること、チョークと黒板消しがあることも確かめた。さらに、机と椅子の配置を確認し、簡単な片付けをした。

b ■教師・受講者・アシスタントの座席の工夫

授業者は黒板を背にした中央の席にすわり、アシスタントの学生は入口側の席に、受講者の留学生には奥の席に、それぞれ着席してもらうことにした。

授業者が外国人留学生の方に目を向ければ、一度に受講者全員が視野の中に入るようにとの配慮からである。

また、受講者とアシスタントの学生が対面できるようにとの思いから、アシスタントの学生には入口に座ってもら



うことにした。(前図が座席表である)

c ■物環境としての講義要項・教材

授業が始まればすぐに配布できるように、講義要項と教材の「ニャーゴ」のカラーコピーを自分の手元に置いた。受講者に配布する要項と教材は、授業者が最初に届ける物的環境であり、メッセージである。できれば、授業者から受講者に、直接、手渡したいと考えている。

d ■授業始めの挨拶

10時25分、最初に入室してきたのは、オーストラリア人留学生のジョージ君であった。その直後に中国人留学生のマー（馬）さんが、入室してきた。

K「あそこに座ってください。よく来てくれました。さあ、始めましょう。はい、それじゃあ始めましょう。おはようございます。」

学生たち「おはようございます」

栗原、学生たちの朝の挨拶に対して、もう一度「おはようございます」と声をかける。

挨拶の動作と言葉は、教師と学生の間で交わす最初のコミュニケーションである。挨拶語はコミュニケーションの入口の言葉であり、外国人とも最も簡単に通じ合える共通の言葉である。

さらに挨拶語は「マナーの言葉」でもある。マナー(manner)の言葉は、あたかもマンネリズム(mannerism)に陥るかのように、日常生活の中で何度も使い古したあとで、当たり前のように口を突いて出てくるようにしなくてはならない。挨拶語は、マナーの言葉であり、マンネリズムの言葉であるとも言える。

e ■呼名と返事——最初の言語表現活動

出席者を確認するために、学生の名前を呼んだ。教師側の呼名に対して、名前を呼ばれた学生は「はい」と返事をした。

返事とは、文字どおりの「お返しごと」であり、具体的には「はい」という言葉とともに、笑顔やまなざしも返ってくる。授業者と受講生の間で交わされる最初の言語コミュニケーションであり、多くの非言語のコミュニケーションの内容も交わされることになる。

教師は、つづけて「きょうは……」と言いながら、名簿で名前を確認する。

栗原「男だからジョージ君と呼んでいいかね」。これは返事への心構えを促す言葉でもある。ジョージ「はい」。

「はい」という返事は、もっとも簡単な「発言(発表の言葉)」であることにも留意したい。「はい」と返事のできる人(それが留学生であっても幼稚園児であっても小中学生であっても)は、さらに難しい言葉を表現できる可能性を持っている人であると、教師は考えなくてはならない。教師の呼名と学習者の返事は、授業の中で必須となる最も簡単なコミュニケーションなのである。

栗原「マー・シンエン(馬新媛)さん」と呼名する。マーさん「はい」と返事する。

そこへ、3人目の受講生が入ってくる。

栗原「そしたら、ここに座ってください。(3人目の学生が着席したのを確かめる)。

マー・シンエンさん(はい)、ビショップ・ジョージ・ゴーさん(はい)。そして、あな

たが、シェピンカ・イホール・ヤロラボービッチさん(はい)。ウクライナからだね」

f ■要項の文字を読む

栗原「3人ね。そしたら、まず、ここ(要項の第1行目)を、ゆっくり読みますから。いいですかね。2004年「異文化を学ぶ、日本の伝統文化と現代」第10回。日本の小学校の教科書から、小学校2年教材「ニャーゴ」を読む。」

授業者側は、ゆっくりと、口を大きく開けて、はっきりと読むことを心がける。

授業者が講義の要項を読むということは、受講者は手にした要項を見ながら、授業者の声のスピードに合わせて自分の目で追いながら読むことである。耳からの聴覚情報(Audio)と目からの視覚情報(Visual)を一度に組み合わせるという方法であり、視聴覚教育(Audio Visual Education)の原点でもある。

視聴覚教育とは、TV受像機やOHPやパソコンを使用しなければならないと考えてはならない。教室の中で日常的に行われている教科書を音読する、挿絵を見るなどの目と耳を研ぎ澄ませて向かうことの中に、学習活動の原点が存在している。教師とともに子どもたちがプリント類を読むことは、文字どおり「視聴覚」をフルに活動させた、日常的な情報の獲得活動なのである。この活動の意義が、教師に正しく認識されなくてはならない。

g ■教師の自己紹介と日本語の面白さ

栗原「私の名前はね(と言って、授業者である栗原の氏名を縦書きに板書し始める)、といねいに書こうね。(「桑原」と書く)。こんな字を書いて、(さらに名前も書く)下に日を書くね、「昭徳」と書き終える。なかなか意味があってね。

日本の文字(漢字)には、音と一緒に意味があるんですよね。

「桑」というのは、植物の名前で、あの「かいこ(蚕)」というの、分かるかね。シルクを吐き出す虫がおるね(と言いながら黒板に虫の絵を描く)、ワーム(warm)、(ジョージ君「はい」と返事をする)、これがとても好きな植物、これが食べて大きくなる植物が「桑」です。日本語って面白いですよ。

「原」はね、fieldです。原っぱですね。シルクを吐く虫が好んで食べる「桑」という植物の「原っぱ」、というのが私の家の名前です。

(ジョージ君「へえ」という声。ほかの留学生からも笑いが起こる。)

下の名前の「昭徳」の「昭」はね、まあ「明らか」、clearというような意味でしょうかね。clear。clear、分かる?

ジョージ君「はい」と返事をしたあと、「水」と応える。

栗原「うん、水みたいに澄んでいる、きれいな、という意味ですね、明らか。」

これ(徳の字を指さして)なんかね、もうvirture、もう道徳、moralね。」

教師の説明に対する受講者の反応が、予想以上に素早く、感心することになる。

この手法を、このあとも、さらに適用することにする。

h ■日本語の中の漢字のルーツは中国

栗原「あなたは、中国のご出身ね(マーさん「はい」と応える)、そしたら、これ(漢字)は得意なものですね。これは、もともと、あなたがたの国の文字ですからね。

ちょっと(日本人が)借用していますがね。(笑い)これは、マーさんの国の中国から

ね、日本に渡ったんですよね。紀元、何年くらいだったですかね、600年代でしたかね。今は2004年ですから、今から1400年くらい前に中国から渡って来た文字なんですね、これ。だから、こういうの（文字）をね、（板書しながら）漢字といいます。漢というのは、そのころの中国の名前ですね。

だから日本語にはね、この漢字と「くわはら」のような平仮名も、そして「クワハラ」のような片仮名もありますよ。3種類あるんですよ、表現の仕方が。

日本語って難しいでしょう？（留学生、笑いながらうなずき、同意してくれる）

しかし、もともとはといえば、中国の漢字を使っているのです。

これ（栗原の「く」）はね、例えば、「く」という平仮名は「久」という漢字をくずしてできた文字なのです。栗原の「く」は、こう書くけど、もとは、この字（久）から来ているのです。

「わ」という字は、これ（和）から来ているのです。面白いでしょう。

「わ」は、これ（和）を続けて書いたら、こうなります。（漢字「和」から徐々にくずして、平仮名の「わ」の形になるように板書する）

「は」は、波（なみ）という字から。（篇のサンズイを続けて書いてみせる）似ているでしょう？「ら」は、（と言って「良」という字を続けて書いてみせる）

アシスタントの日本人学生の方から「すごい」の声が出る。

栗原「すごいと言ったって、君たちは習ってきたでしょう。

面白いでしょう？（平仮名の）「くわはら」というのは、もともとマーさんのお国の言葉を平安時代（794年だったかな）に、こんなのができるのか。先生より、こちらの生徒（アシスタント）の方が正しいね。800年くらいに、この平仮名ができたんだね。

仮名という字もね、「仮の名前」なんですよ。そうすると漢字というのは、本物ですからね、（真名と板書しながら）漢字のことを「真名（まな）」と言います。

この「仮（かり）」というのは、（本物に対する）「にせもの」でしょう。

つまり「わ」という平仮名は、本物はこっち（「和」という漢字）、だから中国の漢字が本物（真なるもの）で「真名」と言って、こっちを「仮名」と言っているのです。

そして（仮名の中にも）、平仮名（ひらがな）と片仮名（カタカナ）があります。ね、（日本人アシスタントに対して）けっこう勉強になるでしょう？。

アシスタント学生「はい」。（外国人留学生に対して）少し分かった？

日本語というのは、やりだしたら、けっこう面白いんです。

i ■ アシスタントの紹介をしながら、さらに漢字の学習

栗原「そしたらね、いま、ここに「アシスタント」と書いてあるでしょう？

アシスタントの、こちらが竹下真生さん、こちらが森田尚子さんです。

なかなか、かわいいでしょう？（笑い）私の研究室は、写真で選考しますからね。（笑い）ああ、（冗談で言っているということが）分かっているんじゃないね。

あもう、成績を問いません。おう、そうだ、成績もいいですよ。なぜ、かわいい美人が座っているか、分かりましたね。

なぜか、写真選考だから（と言って「写真選考」と板書する）。photo、photography choosing。冗談ですよ。（笑い）

これを本気で受け取ってくれて、中国やオーストラリアやウクライナにみなさんが帰っ

て、山口大学の幼児教育は写真選考だったと言っではいけませんよ。洒落が分かっているかね。(大笑い)

ついでに、日本語の面白さでね、竹下真生さん(と言って板書)、本当は本人に書いてもらう方が良いでしょう。(字を書くのが)上手だからね。

これは何かね、竹は? バンブー(banboo)。(留学生の一人が発音する)

バンブーというのは(栗原、竹の略画を描く)、「下」というのは(と言って、竹の絵の下に印をつける)、これ(竹)の下、underですね。(ジョージ君たち、笑い声を上げる)。だから、竹下さんの家は(家の形の絵を描く、笑い)、竹林の下の方あったんでしょうね。

これ(真生)は、お父さんやお母さんが付けた名前前で、これ(真)はね、true、真理、これ(生)はね、live、ほんとうに生きている人ですね。

呼吸はしているよね。(竹下さん「はい」と返事をする。受講者たち、笑い声)

(日本語の漢字には)なにか、一つ一つに意味があるというのが、面白いでしょう。

その面白さは、(中国人留学生マーさんの方を見て)あなたも知っていますよね。

マーさん「はい」

j ■もう一人のアシスタント、森田尚子さんの紹介

栗原「その次は、森田さん。森田さんは「尚子(ショウコ)」と読むんだったよね。

(森田「はい」と返事。栗原、板書する。)

森は、何? これは?(と言いながら、栗原、木のたくさん生えている森の絵を描く)

wood、木が茂っているね。森田さんから「forest」の声。

だから、森田さんちは、木がたくさんあって、そこに(田んぼの絵を描きながら)田んぼがあったんでしょうね。(留学生たち、笑い声)

もともと「田んぼ」というのは、これ(田という字の形の絵を描く)からきているんですよ。田んぼの土地は、縦・横になっているからね。似ているね。

森田さんのお宅には、森があって、近くに田んぼがあったお家だろうと私は思います。

尚子さんの「尚(ひさ)」は「たつとぶ」かな。(森田さん「和尚さんの尚」と教えてくれる)意味は? 「大切な」という意味じゃないかな、尊ぶ(たつとぶ)。

(竹下さん、持参していた電子辞書を引いて、「ああ、とうとぶこと。たつといこと。つかさどること」と教えてくれる。)

栗原「だいたい尊敬の尊、たつとぶだね。大事にするということであるし、大事な子どもだという意味ですね。子どもというのは、これ(絵)、赤んぼ。しかし、(生まれたあと)大きくなっていますよね」(笑い)

栗原「あ、子どもって、大きくなりますからね。だから、森に田んぼがある家の、大事な子どもという意味ですね。大事にされて育ったということですね。日本語って面白いでしょう」

k ■中国人留学生、マー(馬)さんの名前から

栗原「ついでに、漢字のマー(馬)さんの(名前)は、できるかなあ。

マーさんは、マー・シン・エン(と言いながら、栗原、黒板に「馬新媛」と書く)。

はあ、これはできる。(笑い)マーさんのお家には、これ(馬)、家の名前でしょう?

(マーさん「はい」と応える)ええとね、馬がいたんですね。(学生たち、爆笑)お馬

さんを、たくさん飼っていたんでしょね。

馬（うま）がたくさんいた馬（マー）さんのお宅に、「新（しん）」、これ、何？」

ジョージ君「新しい」と応える*。これ（媛）、なに？ お嬢さんという意味でしょう。

マーさんのお宅に、新しく「才媛」というと、「うん、能力のある優れた女性です」（笑い）。電子辞書を引いた竹下さんに向かって「何て書いてある？」

竹下、辞書の内容を読んで「学問、才能の優れた女性」という。（笑い）

栗原「だから、（マーさんは）日本に留学してきているんですよ。才媛とは「学問、才能の優れた女性」のことですよ。」

この行から6行分ほどさかのぼったところに、「*」の印を付けておいたが、この時点で、すでに受講者の一人、ジョージ君が栗原の発問に対してすぐに応答してくれている。教師と受講者の間で対話的な言語コミュニケーションが成立している点に注目していただきたい。幸いにも、ジョージ君をはじめ3人の留学生の既知既習の日本語能力と漢字に対する興味が、授業者の発問と合致しているのである。対話的な授業は、留学生に対する授業でも可能であることがわかる。それも、最初の授業の導入部分で。

k ■表意文字と表音文字

栗原「ところがねえ、ジョージ君の「G・e・o・r・g・e」の一つ一つは、意味がないのよね。（ジョージ「はい」）。こういう（日本語の漢字）のを、意味のある文字だから、表意文字、おぼえておきなさい。一つ一つの文字に意味がある、ね。これ（英語の文字の1字）は意味はないが、音だけある。表音文字。G・e・o・r・g・eのように音だけで、意味はない。

だから（この文字だけを見ても）、文化のルーツが違うのね。こちらの表音文字の方は、バラバラね。こっちは、意味をもっている。人の名前の一文字にも意味がある。

いまでも中国では、漢字の数は5万字くらいかな？、康熙字典なんて、あるでしょう。日本では、よく使う漢字は1万字くらいかな。そして、小学校では、およそ1000字かな。（次回、教育漢字を持参する予定）

こんなことをやって、全部の時間が終わってはいけないので、これ（「ニャーゴ」のコピーを示しながら）をやりましょう。」

講義の中心として予定していた教材「ニャーゴ」の音読については、本論（2）で論じることにする。

4. 受講者のミニレポートから

この授業は、大学の時間割上は2時限目の10時25分に開始して11時30分までの約65分間を、栗原が講義をした。講義の前半は、授業始まりと、それにつづく教師側の説明や問いかけと受講生の発言のやりとりが中心であった。講義の後半は、教材「ニャーゴ」の音読の練習活動を中心に進めていった。

65分間の講義のあと、終わりの20分間を確保して、受講生3名とアシスタント2名の計5名の参加者に、ミニレポートを書いてもらうことにした。留学生にも、ゆっくりと授業を振り返ってもらって、授業の感想を書いてもらいたかったので、時間は20分ほど確保することにした。ミニレポートの分量としては、「10行くらいを目標にしてください」と指示した。

記入は、講義の最初に手渡した講義要項の下半分の記入欄である。

以下に、受講者3名と、アシスタント2名のミニレポートを、そのまま収録する。

●ミニレポート●2004.12.16.異文化を学ぶ (栞原)

馬 新 媛 (中国人留学生)

この授業はおもしろかったです。

日本へ来る前に、私の趣味は幼児教育です。

今 (の授業の)、初めでは日本の教育方法を感じました。本当によかったです。

授業の中に (で) 先生は、おもしろく言葉で私に日本の漢字を教えました。そして、私に日本 (語) の発音、読む (読み) のリズムなどを教えました。

私は、この授業が大好きです。

(日本の教育と) 中国の教育を比べて、本当に違います。

教材は、もっとおもしろくて、言葉はもっと生動 (生き生きと動いて)、気分はもっと協和 (的) です。

次の授業が楽しみです。

●ミニレポート●2004.12.16.異文化を学ぶ (栞原)

ジョージ (オーストラリア人留学生)

今日の事業 (授業) は、思白 (面白) かった。

先生はプロな (の) 先生のように、いろんなことをい生い生で (生き生きと) 教えてくれた。

日本の小学校の教科書から小学校2年教材「ニャーゴ」を読む前に、上手に日本語の文字について、いろいろ教えながらみんなのじこうしょうかい (自己紹介) をしました。

文書(文章)の声を出して、読みかた (方) といろいろな教育的なことを習えました。「ニャーゴ」のイントロは思白 (面白) かったので、続けて読みたい。

先生はいいし、アシスタントもかわいいし、楽しかったので、つぎの事業 (授業) を楽しみに待っています。

●ミニレポート●2004.12.16.異文化を学ぶ (栞原)

イホール (ウクライナ人留学生)

今日の授業で小学校の教科書を読んでみました。

日本人の子どもたちは、学校で楽しく勉強していることが分かりました。

そして、生徒達の前で読む先生の読み方を習いました。

受講者3人にとって、この授業が、どうにか「わかる授業」になっていたことは確かなようである。

受講者にとって「わかる授業」とは、受講者自身の既知既習の知識段階から出発して、その授業時間内に、新しい未知未習の範囲内に受講者自身が自分の力で踏み込むことである。とりわけ、受講者が授業の出発点において持っていた日本語の中の漢字の知識を元にしたがりの新しい漢字の知識は、興味を引いたようだ。(注2)

この「わかる授業」の構造は、幼児においても、小学校児童においても、中学校生徒に

においても変わらず、共通である。

このたびの異文化授業において、外国人留学生の日本語に関する授業においても、簡単に「わかる授業（わかりやすい授業）」が実現できたと考えたい。

5. アシスタント学生が学んだこと

以下に、アシスタントとして出席してくれた2名の4年生のミニレポートを、そのまま収録する。

●ミニレポート●2004.12.16.異文化を学ぶ（栗原）

アシスタント、竹下真生（幼児教育4年）

漢字の意味を一つ一つ考えながらの自己紹介は、たいへん興味深いものでした。栗原先生は、ただ単に名前を紹介するだけではなくて、受講生が興味をもてるような話をたくさん盛り込みながら自己紹介をされたところがとても良かったと思います。

日本の「かな」とは中国の「真名（漢字）」に対しての「仮名」であることから、馬さんの出身である中国と私たちの住む日本との間の深いつながりを感じることができたし、漢字が表意文字であり、オーストラリアやロシアのアルファベット（表音文字）とは性質を異にすることも知ることができました。

また、先生はいつも、教えようとする事柄を、私たちの目に見えるように示されるので、とても分かりやすいです。例えば、先生は黒板をフルに活用されます。今回の講義でも平仮名のもとには漢字であるということを、私たちの目に見えるように、黒板を使って示されました。漢字の「久・和・波・良」の形が、少しずつつくづれながら平仮名の「く・わ・は・ら」になったのには、感動しました。言葉による説明だけではなく、実際に漢字が仮名に変化していく様子を黒板に示されたことで、私たちは納得することができたのだと思います。私も、先生のように黒板を有効に使える教師を目指したいです。

先生のわずか十数分の自己紹介で、ふだん何気なく使う漢字や仮名に、ますます愛着がわきました。「ニャーゴ」の音読の場面では、「活動」とは「生き活きとした動き」であることを改めて実感しました。

栗原先生は、音読の仕方について「声の高さを少し上げると子どもが聞き取りやすい」「（手でリズムをとって）『、』は1拍、『。』は2拍休むとよい」と、具体的なアドバイスをくださいました。

そして、すぐに練習する時間をくださり、すぐに一人一人のよいところを評価されました。楽しそうに音読する受講生の姿が印象的でした。そうして3人の受講生は、栗原先生とのやりとりを繰り返すうちに、はじめとは比べものにならないほど上手に読めるようになっていったのです。

特に、ジョージさんは飲み込みが速く、みるみるうちに上達していきました。「活動を通して」というのは、まさにこのことだと思います。また、今回の講義を何度もふり返ってみると、受講生たちの「活動＝生き活きとした動き」を生み出したのは、栗原先生の指導そのものだということがわかります。

アシスタントとしての参加でしたが、内容の深い講義で、たいへん勉強になりました。今後このような勉強の機会がありましたら、是非また参加させてください。

●ミニレポート●2004.12.16.異文化を学ぶ（乗原）

アシスタント、森田尚子（国際理解4年）

先生は、いつもされているように丁寧に、わかりやすく話されていました。

私も知らなかったことが、たくさんありました。

いちばん驚いたのは、音読をするときの「間のとり方」でした。「間が無い＝間抜け」と、その反対の「間が空き過ぎる＝間延び」ということです。深くうなっていました。だれかに言いたい気持ちです。

教材「ニャーゴ」を再び勉強する機会に恵まれましたが、ほんとうに面白い教材だと思いました。

まず、タイトルを読んでニコニコと笑っているジョージさん、イホールさん、マーさんの顔が印象的でした。タイトルですでに引きつけられていました、「くすくす」笑うという反応が見られて、なんだかうれしかったです。

3人とも、とても上手に音読されていて、先生からのアドバイスをうけたあと、読みがすぐに上達していました。（なんという吸収力!!）

先生が教授学のことをおりまぜて説明されているとき、ジョージさんの目がキラキラと輝いていました。

みんながどんどん物語の世界に入り込んでいくのがわかりました。アシスタントの私まで、とてもおもしろく勉強できました。日本語のステキな世界を体験できたと思います。

授業においても、子どもたちが目を輝かせ、納得がいった表情が見られるようにしていきたいです。参加させていただき、ありがとうございました。

アシスタントの二人は、乗原が卒業論文の指導をしている学生である。二人とも、将来は小学校教師を志望している。今回の異文化講義の内容や授業の進め方は、二人のアシスタントにとっても、期せずして将来の仕事に役立つことになった。

以下は、「大学留学生に対する「わかる授業」の実践（2）」につづく。

（注）

（1）本講義第1回の参加者は次のとおりであった。

受講者、ジョージ君（Bishop George Goh）、オーストラリア人留学生。

マーさん（馬新媛）、中国人留学生。

イホール君（Shepinka Ihor Yaroslavovych）、ウクライナ人留学生。

アシスタント、竹下真生さん（山口大学教育学部、幼児教育研究室4年生）

森田尚子さん（山口大学教育学部、国際理解研究室4年生）

（2）「わかる授業」の構造や成立領域の詳細については、乗原昭徳著『わかる授業をつくる先生』（図書文化、平成9年刊）中の「わかる授業の成立領域」、42～50ページを参照していただきたい。